

令和3年度（第2回）研修
すとうあさえ先生 基調講演（講演録）



【テーマ】

「和歌山の‘食’から、保育の展開を考える」

【レジュメ P1～6】

- 季節の行事を「五感を介した活動」という視点で見えていく
- 季節の行事に大切な2つのことは「豊作や健康への祈り」と「豊作や健康への感謝」
 - ・祈りと感謝が底辺にあって、行事の祝い方を考え、時代とともに育まれてきた
- 昔の人はどう祈り、どう感謝していたのか
 - ・身近にある草、木、花、葉などの自然の生態をよく観察していた
 - ・暮らしの中に自然が入っていた、距離が近かった
 - 例えば、においの強い草（菖蒲やよもぎ等）を厄払いにもちいた
 - 例えば、子どもの成長を願い、かしわの葉でもちをつつんだ
- その土地、その時季に収穫できる食材で行事食をこしらえてきた
 - ・それをみんなで食べてハレの日を祝ってきた
- 季節の行事は、人々の直接体験から生まれている

【レジュメ P7～9】

- 現代のこどもたちは、
 - ・生まれた時からPC、スマホ、タブレットがある暮らし
 - ・デジタル化、IT化された暮らし
- すとう先生の孫（小5）の話
 - ・孫が来て友だちの「〇〇ちゃんを連れてきた」と言う。彼のノートPCはZOOMに繋がっていて、画面から「こんにちは」と〇〇ちゃんが挨拶をしてくれた。時代はここまできたか！
- 「直接体験」の機会が少なくなっている
 - ・直接会って遊ぶのではなく、ZOOM越しに遊んでいる子も増えてきている
- 「直接体験」に比べ、「間接体験」や「擬似体験」の機会が圧倒的に多くなった今、子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念される。

（平成8年7月19日中央教育審議会答申より）

 - ・20年以上前から、直接体験の減少への警鐘が鳴らされていた
 - ・今後の教育において大事なものは「直接体験」である

【レジュメ P10～11】

- 幼児期の学びの特性
 - ・五感を通じた体験の重要性……脳の発達を促す経験

- ・子どもたちには、「触覚」、「臭覚」、「味覚」、「視覚」、「聴覚」の五感を重視した直接体験をさせる必要がある
- ・保護者にも、幼児期の直接体験の重要性を伝えてほしい

【レジュメ P12~13】

○季節の行事を、五感を介した直接体験という視点でおさらいする

- ・驚き、感動、不思議さを子どもたちが感じる活動

○お正月

- ・新しい年を迎えるにあたり「来年こそはいい年にしたい」という希望をもって迎える行事〜リセットする
- ・様々な行事がある中でも、もっとも大切な行事
- ・おせちは縁起のよい食材が詰まっている

○お餅はとても重要なアイテム。年神様にお供えしたものを正月におろして人間が食べる

- ・神様と人間が同じものを食べることで、神様の力をいただく意味がある
- ・日本全国に雑煮があり、その土地ごとの雑煮の味わい方がある
- ・年神様がくると鏡餅に座るので、その力が宿っているありがたいお餅

【レジュメ P14~17】

○獅子舞

- ・すとう先生の園では、新年最初の登園日に獅子舞に来てもらうのが恒例
- ・笛や太鼓の音楽にのって舞う獅子舞に、子どもたちの頭を噛んでもらう
- ・保育士が獅子舞になる園もある
- ・獅子舞には怖さと同時に神聖さや「今日はいつもと違う日だ」と感じられる。そう感じることで、子どもたちの感覚を養うためにもとても大事なこと

○どんど焼き

- ・本来は1月15日の夜に行う。旧暦の満月の夜の火祭り
- ・すとう先生の園では昼間に行う。子どもたちは大きな火の熱、きな臭いにおいや目に染みる感覚を体験し、焼いたお餅を食して味わう
- ・地方によっては松飾りや正月飾りで小屋を作って子どもたちが一晩過ごし、その後火をつけてどんど焼きをする風習がある

○節分

- ・季節の分かれ目で、立春の前日。2022年は2月3日。
- ・衛生上の問題で豆を投げるのが難しいが、豆の力で鬼を追い払うことを子どもたちに教えてほしい。～豆のパワーを新聞紙に移すような演出・工夫が必要

○やいかがし

- ・節分に欠かせない、焼きたいわしの頭をヒイラギの枝に刺したもの。
ヒイラギの葉のとげとイワシの匂いで鬼を追い払うおまじない
- ・ヒイラギのとげに触ってみたり、焼いたイワシの匂いをかいだり食べたりする体験ができる。

- ・古くから伝わるおまじないの不思議さを、子どもたちとを感じる
- すとう先生の園には、園庭の北東にヒイラギモクセイが植えてある
- ・北東は鬼門であり、鬼封じで植木屋さんが植えてくれた
 - ・年中の子にヒイラギを触らせたなら「痛い」とびっくりしていた
→ヒイラギの葉と、違う木の葉とを取ってきて見せて「こっちは痛くない」と教えてくれた。
トゲのある葉とない葉との違いに気がついた。ささやかな気づきだけど、すばらしい

【レジュメ P19～26】

○ひな祭り

- ・女の子の成長を祝う行事。悪魔を払う効果のある桃の花を飾ったり、桃のお酒を飲んだりして、厄を払う
- ・雛人形は婚礼の様子を表現しているといわれる。よく観察してみると、人形それぞれの表情や動き、持ち物から、雛祭りの物語を楽しく話し合える
- ・地域で声をかけると、処分に困った雛人形を譲ってもらえるかもしれない
- ・石や花など自然のものをお雛様に見立てる。園庭や公園でお雛様探しができる

○端午の節句

- ・月初めの午（うま）の日＝端午。旧暦では6月、気温が上がって悪い病気が流行ってくるので、菖蒲やヨモギで厄を払う
- ・本来は菖蒲やヨモギが主役になる行事。触ったり、においをかいだりする
- ・「食わず女房」は、菖蒲の匂いで化け物を追い払うお話
- ・草をちぎってすり鉢に入れてすって、水を入れる。匂いや色合いが変化していくので、ごっこ遊びなどに使える。嗅覚が想像力を刺激する

○七夕

- ・短冊に願いを書いて竹にかけるのは、日本独自のもの
- ・なぜ笹なのか？ 笹がさらさら揺れる音を聞いて神様が来てくださる（依り代）
- ・里芋の葉の朝露は天の川のしずくと言われているので、その朝露で墨をすって願いを描く。
墨をするときの匂いもよい

【レジュメ P27～32】

○お月見

- ・園の行事というよりも家庭に帰ってから祝う
- ・昔の人は月の満ち欠けで日にちの目安としたので、日常的に空を見上げて月を確認していた。
- ・旧暦の8月は秋の真ん中で、空気がとても澄んでいて月がきれいに見えるので、十五夜に月をめぐる。その際に、収穫物、旬の物、団子などを飾って感謝をささげる
- ・来年の十五夜は9月10日、日本独自の月見である十三夜は10月8日となる
- ・家族で一緒に外で月を見るときに、つないだ手のぬくもり、冷たい風、聞こえてくる虫の声…
…などの記憶が積み重なって、子どもたちは一緒に月を見る幸せを感じる
- ・月見団子をいっしょに作って食べることも、よい思い出になる

○冬至

- ・今年も来年も当時は12月22日。冬至と言えばゆずとかぼちゃ。
- ・ゆずは体を温め、ゆず湯に入ると1年間かぜをひかない。香りもぜひ楽しんでほしい
- ・かぼちゃは別名なんきん。かぼちゃは栄養豊富なうえ、保存がきく野菜の一つだったので、昔は冬場に食べた。切ると黄色くて太陽を連想させる
- ・「運盛り」→「ん」のつく食べ物をお盆に盛り、いろいろな野菜や果物に触れてみよう！
なんきん、にんじん、れんこん、だいこん、きんかんなど、
また、「ん」がつくもの（えほん、プリンなど）を子どもたちと言い集めてみると楽しい

【レジュメ P33～】

- 「和食：日本人の伝統的な食文化」が2013年ユネスコ無形文化遺産になった
 - ・正月などの年中行事との密接な関わりが、和食の特色として挙げられる
 - ・自然の恵みである「食」を分け合い、食の時間を共にすることで家族や地域の絆を深めてきた
(農林水産省)
 - ・ハレの日には特別の料理（行事食）を皆で食べてきた
 - ・和食は、皆で食べる（共食）が基本
- 園の給食に行事食を
 - ・行事食はその土地の食材を使った郷土食でもある
 - ・子どもたちと地域の人たちとのコミュニケーションのきっかけや、自分の住む土地に興味を持つことにもつながる
- 和歌山の行事食
 - ・なれずし、かきまでごはん、いのこもち、わさびずし、かきまぶり、など

【講演後記】（～馬場先生を交えて、すとう先生とのディスカッション）

- 「運盛り」～7月7日に7回同じことをすると良いことがある、など子どもたちと楽しめるおまじないはいろいろあった（すとう先生）
- 元旦の朝は下着から着るもの全て新しいものを身に付けた。そうした非日常的であらたまったことをすると、子ども心にも晴れ晴れとした気持ちになった。（すとう先生）
- 正月は特別な行事であるということを、保護者にも是非わかってほしい（すとう先生）
 - ・家族揃って大掃除や飾り付け、お節などを準備して正月を迎える
 - ・明けましておめでとう！と挨拶をして、新鮮な気持ちになる
- 行事の由来や習わしは、今の保護者や若い保育者も知らないのではないか。地域等と連携して、それを伝えていくことも園の大切な役割となってきている（幼年機構 飯田）
- 行事と直接体験をつなげて考えると、いろいろな可能性が見えてくる（すとう先生）
- コロナ禍で保育を見直す機会とすることができた（馬場先生）

- 例えば、何故「粘土遊び」をするのか
- 令和になり、「ごっこ遊び」も本来の行事食に触れることで本質が見えてくるのではないか
- 食べ物を絡めることで、子どもたちの印象にも強く残る活動になるのではないか

○ZOOMのような媒体がこれだけ普及してきてもできないことは味覚や嗅覚。そして触覚を使うこと。そこをより丁寧に乳幼児期における直接体験として保育で行わなくてはならないと考えている。 (馬場先生)

○幼児期の体験の豊かさは小学校教育への接続においてとても大切であり、いま議論されているところである。 (幼年機構 飯田)